

プロレタリア文化大革命と社会主義労働

小 嶋 正 巳

I 社会主義労働の性格

1 社会主義労働における共産主義的要素と『旧社会の母斑』

人間自身の社会的諸関係から抽象していえば、労働は、『さしあたり、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち、それにおいて人間が人間の自然との質料変換をかれ自身の行為によって媒介し・規制し・統制する一過程である』^①。労働は、『有用的労働としては、人間の、どんな社会形態ともかかわりのない一生存条件であり、人間と自然とのあいだの質料変換つまり人間の生活を媒介するための永久的な自然的必然である』^②。

労働過程のこの一般的性質は、しかし、商品生産社会＝ブルジョア社会においては、労働力商品の資本家による使用価値の実現として現象することによって、それに特有の歴史的姿態をつくりだす。

すなわち、以下の行論に必要なかぎりというならば、それは、『資本家によって、生産手段が合目的的に使用されるように、見張られ、……資本家が購買した諸物のあいだの・彼に属する諸物のあいだの一過程』^③であることから、まず第一に、労働者にとっては、労働は『肉体的生存維持のための手段』^④たるのみであって、そこでは、労働者の人間性はまったく『疎外』されてしまっている。

第二に、この『疎外された労働』は、ブルジョア社会固有の分業を構築する。すなわち、『労働が分配されはじめるやいなや、各人は一定の専属の活動範囲をもち、これはかれにおしつけられて、かれはこれからぬけだすことができない。かれは、狩人・漁夫か牧人か批判的批判家かであり、そして、もしかれが生活の手段をうしなうまいとすれば、どこまでもそれでいなければならない』^⑥。

これに対し、共産主義社会では、『人間と自然とのあいだの一過程』である労働は、上記のブルジョア社会のそれと比較していえば、つぎのような姿態であられる。

まず第一に、『狭義の厳密な意味では、共産主義的労働とは、社会のための無償労働であり、ある特定の義務をはたすためにではなく、ある特定の生産物に対する権利をうるためにではなく、またあらかじめ規定された法定の基準作業量によることなしにおこなわれる労働、自発的な労働、作業基準量なしの労働、報酬をあてにしない・また報酬についての条件のない労働、公共の利益のために働くという習慣と・公共の利益のために働かなければならないことを自覚した（そして習慣となった）態度にもとづく労働のことであり、健全な身体の欲求としての労働のことである』^⑥。

第二に、このような共産主義的労働は、当然、旧社会の分業を根本的に変革する。言葉の節約のためにやはり古典を引用するならば、『旧来の生産様式は変革されなければならないし、またとりわけ旧来の分業は消滅しなければならない。そのかわりに一つの生産組織があらわれなければならない。そこでは、一方では、どんな個人も人間生存の自然的条件である生産的労働のうちの自分のわりあて分を他人に転稼することができず、他方では、生産的労働が各個人に対してその肉体的ならびに精神的な全能力をあらゆる方向に発達させる機会を提供することによって、それが人間を奴隷化する手段となるかわりに人間を解放する手段となり、こうして生産的労働が重荷から快樂にかわるのである。……旧来の分業の揚棄ということは、……生産そのものの一条件となっているのである』^⑥。『共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもた

ずに、どんな任意の部門においても、修業をつむことができ、社会が全般の生産を規制する。そして、まさにそれゆえにこそ、私はまったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩をし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をすることができるようになり、しかも、狩人や漁夫や牧人または批判家になることはない』^⑩。

以上、ブルジョア社会および共産主義社会における労働のそれぞれの特質を、簡単に対照できるかたちでひきだした。

ところで、ここで問題にするところの社会主義社会とは、周知のとおり、まさにこのブルジョア社会をうちたおして共産主義社会を完成するまでの過渡期の全過程をいう。社会主義社会は、生産手段の私的所有の廃棄＝公有制の実現によって、ブルジョア社会の基礎をうちこわし、共産主義社会の基礎をかためる（この意味において、社会主義は広義の共産主義に包括される）が、このうちたてられたばかりの経済的土台およびその上に構築される上部構造は、一つには生産力の水準がまだ低いことから、もう一つには人間の意識形態にのこる旧社会の残滓がからみあって、まだ十分に成熟していない。それは、プロレタリア独裁下の階級斗争をとおして旧社会の残滓をふるいおとし、しだいに成熟し、しだいに高次の・真の意味の共産主義社会に到達する。

したがって、社会主義社会におけるもろもろの経済的諸範疇は、当然、すべて凝固不変のものとして固定的にとらえられるべきではなく、プロレタリア独裁権力と結合して質的には優位をしめ主導権をにぎるが・新しくうまれたばかりでまだ成熟していない共産主義的要素、それと権力はうしなったが・人びとの意識の中にひそんでまだ完全に払拭されず・人民内部の矛盾につけこんで抬頭しようとするブルジョア的要素、この両者が対立・斗争する矛盾の統一として考えられなければならない。前者が主導権をもって後者を克服し、後者をうちたおしただけ前者がうちたてられ・成熟してゆくのであり、その点からいえば、社会主義社会における経済的諸範疇は、すべてすぐれて発展的な過渡的性格のものであり、同時にまたプロレタリア独裁および階級斗争の概念と不可分にむすびついている。

社会主義社会における労働も、もちろんその例外ではない。

社会主義社会における労働は、上述のように、社会主義的公有制を基礎として共産主義的要素の萌芽をもち、プロレタリア独裁をよりどころとしてそれが主導権をもっているが、同時に、生産力の水準が低いことおよび人間の意識形態の制約からまだ大量の旧社会の母斑をまとっている。

労働力商品化の完全な廃絶、したがって、賃金が労働力の価値に制約されなくなったこと、労働における人間の回復（労働が単なる『肉体的生存維持のための手段』でなくなったこと）、これらの要素が結集して革命的な労働規律をうちたて、社会主義競争を軸として新しい労働組織をうみだし、あるいは労働者が企業管理と技術革新を主導して労働内容をきわめていきいきとした豊富なものにした。これらは、共産主義的要素の萌芽である。

しかし他方では、社会主義労働は、まだ基本的に『一定の専属の活動範囲』に固定しておこなわれ、旧来の分業を一挙に廃棄できない。それは、まだ『健全な身体の欲求として』ではなく、『作業基準量』をもうけて『報酬』をあてにしておこなわれる。その『報酬』は、経済が価値法則を利用して計画化されること、また人びとの頭の中からブルジョア権利意識が消滅していないことからみあって、必要に応じてではなく、労働に応じて格差がつけられる。しかも、『報酬』をとおして労働の積極性を刺激するために、労働の格差以上に『報酬』の格差が拡大される。これらは、いずれも旧社会の母斑である。もっとも、労働に応じた分配原則は、労働力商品化の廃絶を絶対の条件にしており、ブルジョア社会ではけっして実現されることのない社会主義社会の新しい分配原則である。しかし同時に、それは、『報酬』をあてにする労働およびブルジョア権利意識と不可分にむすびつけられており、その面からみると、旧社会のあざやかな母斑でもある。労働に応じた分配原則は、社会主義労働における新旧の二つの要素の対立・斗争、その矛盾の統一物という性格をもっとも端的に象徴している。

さて、上述のことは、社会主義労働の性格として、従来しばしばいわれてきたことである。私がこの小論で解明したいことは、上述のことを前提として、

社会主義労働の二つの要素——新しく生まれ生長してゆく共産主義的要素と死滅してゆくブルジョア的要素のかかわりかた、その二つの要素の対立・斗争のしかたについてである。

すでに先述のように、社会主義社会における経済的諸範疇は、すべてすぐれて発展的な過渡的性格のものであり、したがって、その観点からいえば、社会主義労働の性格を本質的に把握するには、単に二つの要素が対立・斗争しているという分析だけではなく、どのようにして共産主義的要素がブルジョア的要素を克服してゆくのかをみきわめなければならない。社会主義労働は、たえまなく共産主義労働にむかって前進してゆく契機をみずからのうちに内包しているはずである。社会主義労働は、その具体的な労働過程において、たえず旧社会の母斑を克服し・革命し、その中から新しいものをひきだして、日日みずからを變貌させてゆかなければならない。この日日の變貌——革命性こそ、社会主義労働の性格のもっとも本質的なものであって、これがなければ、社会主義労働の生命はない。

つまり、端的ないいかたをすれば、かりに社会主義的公有制を実現し・労働力の商品化をすでに廃絶した基礎の上におこなわれる労働であっても、その具体的な労働過程において、二つの要素の斗争が共産主義的要素の主導下におこなわれず、したがってたえまない共産主義的要素の質的量的発展が確認できないようなばあいは、私は、それを社会主義労働の生命力を断たれたものとする。さらにいえば、二つの要素の対立・斗争において、共産主義的要素が主導権をもっていないとすれば、それはとりもなおさずもう一つの要素・ブルジョア的要素が主導権をもっているということであり、共産主義的要素が受身であり、共産主義的要素がしだいに萎縮してゆく方向にあることを意味している。そのばあい、かりに静止的・固定的にみれば社会主義的形態をもつものであっても、私は、それはもはや社会主義労働ではないと考える。それは、資本主義の復活にむかう労働であり、結局、本質的には新しい型の資本主義労働と考える。

① K.マルクス、『資本論』第1巻・邦訳青木文庫版第2分冊329頁。

- ② K.マルクス，同上書・邦訳第1分冊125頁。
- ③ K.マルクス，同上書・邦訳第2分冊341頁。
- ④ K.マルクス，『経済学哲学手稿』・邦訳国民文庫版106頁。
- ⑤ K.マルクス，『ドイツ・イデオロギー』・邦訳大月版全集第3巻29頁。
- ⑥ I.レーニン，『古来の制度の破壊から新しい制度の創造へ』・邦訳大月版全集第30巻538頁。
- ⑦ F.エンゲルス，『反デューリング論』・邦訳大月版選集第14巻492～93頁。
- ⑧ K.マルクス，『ドイツ・イデオロギー』・邦訳全集第3巻29頁。

2 社会主義労働の発展とプロレタリア独裁

それでは、社会主義労働は、その具体的労働過程において、どのように旧社会の母斑を克服し、新しい要素を発展・成熟させ、日日のみずからの変貌をなしとげてゆくのか。

まず第一に、それは、労働規律の変化にあらわれる。

社会主義革命によって搾取制度が基本的に廃絶されると、従来資本家の監督のもとにもちこまれていた非人間的な強制や労働者相互間の排他的な競争がなくなる。労働者は工場の主人公といわれ、階級的自覚にもとづく新しい自律的な労働規律がうまれる。この社会主義的労働規律は、最初はさまざまな制約から生産現場に主として目がむけられ、生産第一の観点からうちたてられ、そこからなかなかとびだすことができない。しかし、やはりさまざまな具体的契機をとおして（のちにのべるように、生産現場にもちこまれる大衆運動をとおして）、生産第一の観点をうちやぶり、視野を国家全体・世界全体におしひろげて、政治第一の観点をうちたててゆく。労働者は、生産のことについてのみならず、政治のことについてもっともよく論じ行動するようになり、労働態度は、その政治的観点から直接に自律されるようになってゆく。このことは、社会主義労働の発展の軸となる。

第二に、社会主義労働の新しい組織形態としての社会主義競争の変貌があげられる。

社会主義競争は、上記の社会主義的労働規律から必然的にひきだされるその

組織形態であるが、それは、当初のうちはやはり単純な生産競争としてあらわれてくる。しかし、労働者の政治的自覚が深化し・思想が革命化してくるにしたがい、競争はしだいに徹底した相互援助へ変貌し、競争の対象あるいは目標はしだいに直接に政治的性格をおびてくるようになる。このことは、『報酬をあてにしない労働、公共の利益のために働くという習慣と・公共の利益のために働かなければならないことを自覚した（そして習慣となった）態度にもとづく労働』へゆきつく千里の道の第一歩である。

第三に、それは、労働内容の多様化というかたちであらわれる。

このことは、事例をあげていうほうが理解しやすい。たとえば、人民公社化運動の中で『多面手』とか『万能手』とかいわれた農民の労働がそれであり、また主として工業企業における『両参制』のもとにおける労働がそれである。前者は、人民公社の多角経営——農業を主としながら同時に工業・林業・牧畜・漁業・その他の副業をも併挙する——の方針のもとに、従来主として農業生産のみに従事していた農民が、工業その他の生産労働にも従事しはじめ、あれこれの工業労働についても十分熟練したものをさす^①。また、『両参制』——労働者の管理参加・管理幹部の労働参加の恒久的制度化——のもとでは、労働者は、現場の直接生産労働をこなしただけでなく、現場のすべての管理業務を掌握する^②。このようなことを労働内容の多様化といったのであるが、このことは、あきらかに労働を『一定の専属の活動範囲からぬけだすことができない』旧来の分業を一步うちやぶったものである。前者は、工業と農業あるいは労働者と農民という境界に対する最初の一撃であり、後者は、頭脳労働と肉体労働を融合させてゆく一つのみちすじとみえるものである。もちろん、このような労働内容の多様化がそのまま直線的に拡大発展して、それだけでただちに旧来の分業が廃棄されてしまうわけではないが、その具体的な第一歩であることはうたがない。社会主義労働は、このような意味の労働内容の多様化をしだいに発展させてゆく。

第四に、社会主義社会を特長づける新しい要素である労働に応じた分配原則が、しだいにその貫徹のしかたを変化させてゆく。

いうまでもなく、分配は生産の反映である。労働に応じた分配原則自体が新旧二つの要素の対立物の統一であること、先述のとおりであるが、新旧二つ要素がどのように対立し・統一されるかは、一方では労働者の階級的自覚の深さにかかわっており、他方ではその生産力水準によって規定される。すなわち、上記のように、労働規律における政治優先が深化し、労働の組織形態が競争から相互援助に転化し・つまり真の意味の集団労働が確立され、さらに労働内容が旧来の分業を廃棄する方向で多様化してゆくにつれて、同時にまた、それとからみあって生産力が高まり・分配すべき労働成果が質量ともに豊富になるにつれて、労働に応じた分配原則における物質的刺激の機能は、不必要なものとなり、さらには労働者の階級的自覚の深化に対する桎梏となり、ぜひともこれを減殺し除去しなければならないものとなる。逆にいえば、労働者の階級的自覚が深化せず、社会主義労働が日に共産主義の方向への変貌をはたしてゆかなければ、生産の発展は、社会主義労働に残存するブルジョア的要素に依拠せざるをえず、物質的刺激の機能は大いに珍重され強化されてゆくであろう。

この社会主義労働それ自体の発展を反映する物質的刺激の機能の衰退は、労働に応じた分配そのものの衰退・つまりそれだけ共産主義的分配原則である必要に応じた分配というまったく新しい要素の抬頭につながる。必要に応じた分配原則の抬頭・実現は、もちろん、生産力の飛躍的な発展を物質的基礎としないではありえないが、もっと根本的には、まさしくレーニンのいう『社会のための無償労働』にのみ対応するものである。

さて、このような社会主義労働の不断の変化は、すべて生産力の発展をその物質的基礎としていると同時に、他方では、社会主義労働のこのような変化自体が、生産力の発展を不断に・そしてもっとも決定的に加速するという相互作用がある。

しかし、縷言を要するまでもなく、生産力が発展しさえすれば、自然発生的に社会主義労働の変化があらわれてくるのではない。生産力の発展が、自動的に・人間の主観にかかわりなく共産主義的要素を増殖するのではない。最初の起動力は、物の側にあるのではなくて、人の側にある。

さきに労働者の階級的自覚の深化といったが、労働者がみずからの労働を完全に解放するために、科学的な認識にたってみずからの労働を抑圧しているあらゆる要因に斗争をいどみそれをうちたおす・その決意と行動の総体がここでいう階級的自覚であり、またそのエネルギーが最初の起動力となるのである。社会主義社会においては、このような起動力がつねに労働の現場に存在し、社会主義労働の日日の変貌をひきだし、それが生産力を発展させ、その生産力の発展が、社会主義労働の日日の変貌を物質的に支持し・定着させ・その基礎をうちかため、そしてさらにつぎのより高次の起動力の発動=労働者の階級的自覚の深化をもたらす契機となるのである。

この労働者の階級的自覚の深化からでてくるエネルギーが最初の起動力となり、それが生産力の発展にまでゆきつくためには、その不可欠の条件として、労働者階級がみずからの意志を社会的に実行する権力を掌握していなければならない。権力がなければ、すべてが画餅であり、権力を掌握し・しかもそれを生産現場で行使してはじめて、みずからの階級的自覚の深化を社会主義労働の規律・組織・内容に反映させ、あるいはそれをはばむものをうちたおすことができる。社会主義労働の発展・その日日の変貌は、革命的労働者の一人一人が権力を掌握し、生産現場においてそれを日常的に行使することなしにはありえないのである。これが、とりもなおさずプロレタリア独裁である。

プロレタリア独裁は、ここから出発して社会主義国家の最頂点までつきぬけるが、それはまさにこの生産現場におけるプロレタリア独裁権力の日常的行使を保障するためである。生産現場におけるプロレタリア独裁権力の日常的行使は、プロレタリア独裁のもっとも基礎的な・広汎な・一般的な形態である。

- ① 初期人民公社化運動における『小・土・群』工業企業の発展は、まことにすさまじいものがあった。1959年以降、土法製鉄をはじめかなりの部分が整理されるが、その教育的効果は、その経済的効果とは別に根をおろしてゆく。人民公社の工農業併挙の方針のもとに、従来の農業労働がどのような変化をとげるかは、たとえば、つぎの報告にきわめて典型的にみられる。

中共山東省高唐県委員会『公社弁工業的凡点体会』（『人民日報』1958.12.29）、同

委第一書記・曹子丹『両手併拳工農業双双豊収』（『人民日報』1959.1.12），陳敏・周梅雪『公社大弁工業以后』（『人民日報』191.59.12），中央晉東南地委書記・李先唐『公社工業化的坦途・四土化』（『人民人報』1959.1.6）等。

- ② 『両参制』は、『両参・一改・三結合』と総括される。『両参』は、必然的に企業管理の全面的な改革にいたり（『一改』），その結果は、つねに生産の現場において労働者・技術者・管理幹部が一体化している（『三結合』），という意味である。『両参』は、不可避免的に労働の内容を変革し・多様化し・複雑化するが、労働者がそれをやりとげなければ、『一改』に、したがつた『三結合』にいたることはできないであろう。逆にいえば、『一改・三結合』の実現は、労働内容の多様化の証明である。

Ⅱ プロレタリア文化大革命と社会主義労働

1 『三面紅旗』政策とプロレタリア文化大革命

1958年のいわゆる『大躍進』は、前章でのべた社会主義社会の本質をもっとも明確なかたちで突出させた。それは、単に工農業生産が飛躍的に増大し、あるいは巨大な大衆運動の高潮が人民公社をつくりだしたといった個々の現象それ自体よりも、それによって実践的に証明されたところの『総路線・大躍進・人民公社——三面紅旗』政策の論理構造の中にもっとも体系的にうかがうことができる。

すなわち、『鼓足干劲・力争上游・多快好省地建設社会主義』の『総路線』は^①，一言でいえば、労働者の階級的自覚の深化からでてくるエネルギーを生産における『多く・はやく・立派に・むだなく』にむすびつけようとするものであり、つまり主観的能動性の物質化である。したがって、『総路線』は、必然的に『大躍進』に転化する。『大躍進』は、単に既存の物量が投入されただけではなく、それにくわえて労働者の主観的能動性が物質化されて投入されて、はじめて実現したものである。このような主観的能動性の物質化は、これも一言でいえば、労働者の階級的自覚からでてくる創意性が、従来にない・まったく新しい生産の組織と方法をあみだし、それによって『労働の社会的生産力』^②を飛躍させて実現するのである。むろんのこと、これは、精神主義でもなけれ

ば、労働強化でもない。厳密な科学的法則にもとづいている。このようなまったく新しい生産の組織と方法は、それゆえ、『大躍進』の過程にかならず不可避に内蔵されている。それなしには、『大躍進』が実現されるはずがない。そして、その新しい生産の組織と方法の典型的なものとして、『人民公社』がいわれているのである。

したがって、『総路線・大躍進・人民公社』という『三面紅旗』は、相互に論理的な関連をもって構成されており、その体系こそが、まさに社会主義社会そのものの本質的表現なのである。1958年のいわゆる『大躍進』は、この論理を実際に歴史的に証明したものとして評価されるべきであろう。

さて今次のプロレタリア文化大革命の一つの側面を強調していえば、1958年の『三面紅旗』の論理をもっとしっかりと定着させ・根をはらせ・発展させるために、その土壌（人間の意識）を深耕し施肥した革命であったともいえよう。その意味では、今次のプロレタリア文化大革命は、1958年の『三面紅旗』政策の必然的な帰趨として、その延長線上にみなければならない。かりに1958年の『大躍進』がなかったならば、今次のプロレタリア文化大革命は、まったく別の展開をみたであろう。もちろん、この観点だけでプロレタリア文化大革命を評価しきれものではないが、この両者の連続性を把握することは、その評価の一つの核心である。

まず最初に、1958年の『三面紅旗』政策の展開において社会主義労働の中にあられた新しい事物を概括的に列挙してみよう。

第一に、それまでのどの時期よりも激烈な大衆運動があまねく生産の現場で展開され、生産労働がこの大衆運動と不可分に結合したことが、『大躍進』の出発点であった。この大衆運動は、『政治掛帥』を第一にして『社会主義建設の総路線』を生産現場にうちたてる運動であり、その高揚の中で、『主観的能動性を物質化する』方法がつかみとられたのである。

第二に、従来の社会主義競争における物質的刺激と結合した方法が排撃され『比・学・趕・帮・超運動』[®]が一般的形態として確立された。また人民公社化運動の中では、きわめて広汎で大規模な自発的無償労働が展開された。これ

は、『大兵团作戦』とか『大協業』とかいわれて、巨大な集団労働として現象したことが特長的である。

第三に、さきに前章で事例にあげたように、『兩参制』——その典型としての『三定一頂制』^④と『八大員制』^⑤、さらにそれから出発する『小組管理』^⑥の完成——および人民公社における『多面手』・『万能手』の出現によって、労働内容が急速に多様化していった。

第四に、上記の『小組管理』は、『五包小組』^⑦をうみだし、人民公社では『労働の戦斗化・組織の軍事化・生活の集団化』がスローガンとなって、労働は教育や家庭生活ときりはなされたものではなく、それらと結合して一体視されるような観点があらわれはじめた。

第五に、工業における大規模な出来高制賃金の時間制賃金への移行、人民公社における『供給制』の実施等、分配制度における物質的刺激的機能はいちじるしく減殺された。

上記のような社会主義労働における新しい事物——労働の規律と組織と内容の変化は、きわめて大量に・普遍的な現象としてあらわれている。これらは、詳説の要なく、あきらかに社会主義労働における共産主義的要素の高揚・ブルジョア的要素の敗退とみてとることができる。それは、まさにレーニンの『労働の生産性を発展させ、新しい労働規律にうつり、社会主義的な経済条件と生活条件をつくりだす上での労働者の自覚した自発的な創意』^⑧という言葉があてはまるであろう。

ところで、1958年の『三面紅旗』は、1959年以降、最悪の自然条件と国際情勢の変化をおりませず新しい展開をみせる。いわゆる『調整』政策への接続である^⑨。

本来、『調整』政策は、『三面紅旗』政策の論理的発展であり、『三面紅旗』の論理体系自体に内包されているものである。というのは、『三面紅旗』の論理の核は、先述のとおり主観的能動性の物質化にあり、その主観的能動性の物質化の契機は、生産現場に『政治掛帥』の大衆運動をもちこむことにある。その大衆運動は、あれこれの枠をはめることなく大衆をおもいきり発動し、そ

のすべてのエネルギーを放出させて、はじめて新生の事物をうみだすことができる。その過程で『すこしぐらいの偏向はまぬがれがたいことで、それはうなずける』ものであるが、一定の段階で、この偏向は克服され是正されなければならない^⑩。つまり、大衆運動の高潮ののちには、かならず総括がなされ、『整頓工作』がおこなわれなければならない。はじめから『ご法度や戒律』をもうけて偏向をふせごうとするのは、大衆にてん足をするものであって、それはもはや革命的な大衆運動ではない。したがって、このような大衆運動の高潮からうみだされた新しい事物は、かならず一定の段階になると、同時にみずから実現した『大躍進』＝物質的基礎の発展を土台にして・それにみあうように『調整』され、その物質的土台に定着し・根をはり、そしてその中からつぎの高潮を準備するのである。『三面紅旗』の論理は高潮——調整——高潮の論理でもある。

1959年以降の『調整』政策は、当然、この本来の性格のものであった。しかし、この『調整』は、周知のとおり、最悪の自然条件と国際情勢の中ですすめられなければならなかった。そのことが、本来の『調整』をかくれみのとして、『まぬがれがたい偏向』を是正するのではなく、うみだされた新生の事物そのものを否定しようとするうごきがあらわれたのである。

すなわち、自然災害や国際情勢からくる困難を『三面紅旗』政策それ自体の責任にかぶせ、あるいは情勢の困難を理由に『三面紅旗』政策の一層の『強化・充実・向上』の阻止を『調整』の内容にもりこもうとしたのである。このよううごきは、その主観的意図はどうあれ、客観的には『大躍進』の中で大衆運動によってねじふせられ・息の根をとめられようとしたブルジョア的要素をたすけおこし、その復活に手をかす結果にならざるをえない。

本来の『調整』政策にからまる『三面紅旗』否定の『調整』政策、この本質的にはまっこうから対立する二つの路線は、特に初期の段階における具体的な政策においては、なかなか載然と判別しにくい。それゆえに、この二つの路線の対立・斗争は、最初は人民内部の矛盾として提起される。その解決のために『調整』政策は、周知の『社会主義教育運動』と結合して推進される。

しかしながら、この矛盾の性質は、妥協の余地のない・くうかくわれるかの矛盾である。現実の条件がきびしくなるにつれて、この二つの路線の対立は一層明確になり、その斗争はますますはげしいものになり、人民内部の矛盾は敵対的な性格の矛盾に転化する。具体的には、『工業管理70条』^① および『三自一包』^② といわれる『調整』政策がその分岐点をなした。これらの政策が『三面紅旗』政策そのものの否定であることが認識されたと、『社会主義教育運動』は『資本主義のみちをあゆむ実権派』の打倒をよびかけ、教育運動は革命に転化する。かくて、プロレタリア文化大革命の幕は、きっておとされたのである。

- ① この社会主義建設の総路線は、1958年春、中共八全大会第二回会議において、従来の過渡期の総路線にかわって公式に提起されたものであるが、実質は、1955—56年の『社会主義高潮』、ひきつづく1957年の『百花齊放・百家争鳴——反右派斗争』の総括であり、それ自体、具体的な激烈な二つの路線の斗争の成果であり、すでに1955年後半以来実証ずみの路線である。このようにみれば、『社会主義高潮』——『大躍進』——『プロレタリア文化大革命』は、それぞれの発展段階を画していると同時に、みごとな連続性をしめしている。この連続性こそが、私は、社会主義社会の本質的性格であると考える。
- ② 『結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。これは、協業そのものから発生する。労働者は他の労働者たちとの計画的協力において、かれの個人的諸制限を脱して、かれの種族能力を発展させる』。K.マルクス、『資本論』第1巻・邦訳青木文庫版第3分冊553頁。——この意味において、主観的能動性の物質化は、かならず社会主義的集団労働の量的・質的發展とむすびついている。
- ③ 労働者が、自発的・組織的に自分の生産活動を、先進にくらべ（比）、先進にまなび（学）、先進においつき（趕）、先進は後進を援助し（帮）、全体が向上する（超）運動である。そこでは、相互の競合ではなく、相互の援助が軸となっている。
- ④ 幹部の労働参加の典型例。期間・職務・責任を固定し（三定）、十分その仕事をのみこむまでやらせる（一頂）という方法。
- ⑤ 労働者の管理参加の典型例。大衆討議によって現場労働者の中から、計画員・統計員・生産調査員・賃金管理員・工具保管員・労働保護員・品質検査員・原価計算員の『八大員』をえらび（任期交替制）、かれらは、生産労働を離脱しないで現場の管理業務を分掌する。

- ⑥ 労働者の積極性の高揚の中で、従来三級管理の枠外にあった生産小組（生産企業における労働者の基層組織単位、通常10~20名前後）が、現場の日常的管理業務を掌握するようになり、『両参制』の基礎をつくる。これを『小組管理』という。
- ⑦ 小組管理が発展し、単に生産現場の管理業務を掌握するだけでなく、小組員の生産・思想・学習・生活・教育の部面まで、すべて集团的に相互に面倒をみあうようになると、これを『五包小組』という。
- ⑧ I. レーニン、『偉大な創意——共産主義土曜労働について』・邦訳大月版全集第29巻428頁。
- ⑨ 正確には、『調整・強化・充実・向上』政策というべきであり、『力を集中して農業戦線を強化し、すみやかに農業生産を回復・発展させ、同時に工業生産と基本建設の戦線を適当に縮小し、工業内部の比率を調整し、積極的に日用品の生産を増加させ工業の農業への援助をつよめ、労働力をひきだして農業生産の第一線を強化する……』ことを内容とし、1961年1月、第八期九中全会で決定された。
- ⑩ 毛沢東、『農業協同化の問題について』・邦訳東方版論文集・552頁。
- ⑪ 正式には、『国营工業企業管理工作条例(草案)』といい、1961年に制定、全国に試行されたもの。毛沢東の『鞍山鉄鋼公司憲法』に対抗して、劉少奇・鄧小平らが制定したといわれる。前者が、徹底的な政治優先を基底としているのに対し、後者は、それを超経済的な方法と非難し、「経済的な方式で経済を管理」することを提唱し、もっぱら物質的刺激的強化・『一長制』の強化・中央集権の『垂直指導』の強化をその手段とした。
- ⑫ 自留地・自由市場・損益にみずから責任をおう企業（独立採算・自由経営の企業）の拡大、および農業生産における請負生産の推進奨励をいう。いうまでもなく、『工業管理七〇条』の農村版であり、農民の階級分化を促進する政策・物質的刺激的政策である。

2 プロレタリア文化大革命における『奪権』斗争の意義

かさねて指摘するが、社会主義労働の本質的な性格は、共産主義的要素とブルジョア的要素のたえざる斗争・前者による後者の克服にあり、その斗争の起動力は、労働者の階級的自覚の深化であり、それが社会主義労働の日日の変貌に転化する契機は、生産現場にもちこまれる『政治掛帥』の大衆運動であり、それは、労働者の一人一人が生産の現場で掌握しているプロレタリア独裁権力の発動として実現せしめられる。

とすれば、社会主義労働の生命力は、生産現場でいきいきとした・なにもの

にも拘束されない・『政治掛帥』の大衆運動を展開することが保障されているかどうか、にかかっている。『工業管理70条』も『三自一包』も、まさに口実をもうけてこの保障をとりけし、生産現場での大衆運動をしめだすことによって、社会主義に敵対し・資本主義復活の門をひらいたのである。

すなわち、『工業管理70条』は、一言でいえば、困難な状況を口実にして、大衆運動のかわりに生産現場に『正常な秩序』を要求し、大衆の主観的能動性のかわりに物質的刺激で生産をたかめようとした。『あるものは、「革命斗争の中では大衆運動をやってもよいが、建設事業の中では大衆運動をやってはいけない」といい、あるものは、近代工業はきわめて複雑なものなので、一連のいわゆる「正常な秩序」をうちたてうるだけであって、大衆運動はやれないといい、あるものは、政治改革には大衆運動をやってもよいが、技術改革はきまった段どりをふむ「科学的な方法」にたよるべきであって、大衆運動はやれないなどといった。かれらの根本的な観点は、……いきいきとした活発な大衆運動を単純な行政命令にすりかえようというのである。そればかりか、かれらは、自分たちの一連の方法を「正常なもの」、「科学的なもの」といい、真のマルクス・レーニン主義だといい、そして大衆運動を「不正常的なもの」、「非科学的なもの」、マルクス・レーニン主義でないものとしつけた。……革命的な大衆運動こそが、もっとも正常な革命的秩序であり、もっとも科学的な指導方法なのである』^①。生産現場で大衆運動の発動をゆるさないことは、とりもなおさず労働者のプロレタリア独裁の権力を否定することである。

『三自一包』についても、同様のことがいえる。

上述のように、生産現場でいきいきとした大衆運動をもちあげるためには、現場労働者の現場におけるプロレタリア独裁権力の行使が保障されていなければならないのであるが、その権力の行使は一人一人が恣意におこなうのではない。権力の主体は一人一人の労働者であっても、権力が革命的に行使されるためには、労働者階級の権力として行使されなければならない。つまり、かならず明確な政治路線をもった大衆運動として組織されなければならない。このような大衆運動に組織される労働者は、当然、個個ばらばらの労働者ではありえず

有機的に分業＝協業を構成している集団的労働者でなければならない。生産における相互のむすびつきが緊密であればあるほど、その緊密さは、政治的大衆運動の密度に反映するであろう。

ところが、『三自一包』は、つまるところ、このいきいきとした大衆運動の現実的な基盤である集団労働そのもの・さらには集団労働における社会主義的本質の解体をみちびきたすものであった。『三自一包』は、『工業管理70条』に対応して、主として農村人民公社に適用された政策であったが、農業労働の集団的性格は、工業労働のそれとはちがい、まだうまれたばかりでその基礎が十分かたまっていない。特に、『一大二公』^②を旗印として従来の集団労働規模を飛躍的に拡大した人民公社では、1959年以来連続する自然災害によって重要な試練に直面していた時期でもあった。

このような本来の『調整』を切実に必要としていたときに、『三自一包』がおしすすめられたのである。自留地・自由市場・自由経営の拡大と請負生産の奨励は、いうまでもなく、物質的刺激を軸とする管理方式の全面的・体系的展開であって、人民公社の『一大二公』とはまっこうから対立する路線である。それは、『調整』ではなくて転換である。自留地の拡大と請負生産の奨励は、直接的に従来の大規模な集団労働を分断し・個別的労働に解体してしまうのみならず、社会主義的集団農業労働の連帯の核である階級的自覚の深化を物質的関心にすりかえ、量的のみならず質的にも集団労働を解体にみちびく。自由市場の拡大は、その流通面からの絶大の支援であり、自由経営の拡大は、管理幹部に社会主義的集団労働解体のお墨つきをあたえたものである。

『三面紅旗』政策の中からうみだされた共産主義的要素を圧殺しようとしたのは、『工業管理70条』や『三自一包』だけではないし、またこの問題は、経済の側面だけに限られたものでもなく、社会主義社会のあらゆる側面のおなじ問題とからみあっていた。ときにはまっこうから二つの路線が対立・斗争し、ときにはみだ目には複雑にからみあった状況を呈していたが、結局、問題の根本は一つ、プロレタリア独裁を口先ではなく・大衆運動という形態でみとめるのかどうかということであった。

くりかえし強調するが、その否定は、社会主義労働の本質の否定であり、資本主義復活へむかう労働を復活させることを意味する。とすれば、それは、すでに単純な労働制度の問題ではなく、管理のよしあしの問題でもなく、権力の問題であり、革命か反革命かの問題である。ここに、プロレタリア文化大革命の必然性、その中心任務が『資本主義のみちをあゆむ実権派』の打倒・つまり『奪権』斗争と規定された必然性がある。

国家権力そのものがプロレタリア独裁のもとに確保されているにもかかわらず、その基層である生産現場での『権力奪還』が平和的におこなわれず、周知のような激烈な形態——といっても、あれがまさに大衆運動そのものであろうが——をとらざるをえなかった具体的・歴史的な条件は、さまざまな側面からこれをみいだすことができる。たとえば、国際的な条件としては、アメリカ帝国主義およびソ連現代修正主義がこれにかかわるし、国内的条件としては、中共内部のいわゆる『走資当権派』の質と量の問題がある。さらには、またプロレタリア文化大革命がまず文学・芸術・思想の部門からはじまったということあるいは最初の大衆運動の組織が主として学生＝紅衛兵からはじまったということにも関連している。

しかし、ここでは、それらのことすべてに紙数をついやす余裕はないので、従来比較的ふれられていない労働組合の役割と関連させて若干ふれておく。

レーニンが、社会主義社会の労働組合についてつぎのようにのべている。すなわち、『資本主義は、かならず、一方では、社会主義への遺産として、労働者のあいだの古い何世紀もかかってできあがった職業や職種の上の差異をのこし、他方では、労働組合をのこす。労働組合は、非常にゆっくりと長い年月をかけて、はじめてより広い・同職組合的性質のすくない産業別の組合に発展することができるし、また発展するであろうが、そのあとで、この産業別組合をとおして、人びとのあいだの分業をなくすること、どの方面の知識も発達した・あらゆる面の訓練を受けた人びと、なんでもすることのできる人びとを教育し、訓練し、養成することへ移ってゆくことができるし、また移ってゆくであろう。共産主義は、それをめざしており、まためざさなければならず、そして

それにたつするであろう。……党は、さらにすすんで労働組合を旧式にだけではなくて新式に教育し、……同時に、労働組合は、プロレタリアがその独裁を実現するためにぜひとも必要な「共産主義の学校」であり、予備校であり、また国家の経済全体に対する支配を労働者階級の手につし、やがてははたらく人びと全体の手につしてゆくのにぜひとも必要な労働者の組織である』^③。

ここで、レーニンが社会主義社会の労働組合の重要な任務としてあげている『なんでもすることのできる人びとを教育し、訓練し、養成すること』、つまり、中国でいう『多面手』・『万能手』の養成は、労働組合が技術学校になることによって達成されるのではない。再再の強調であるが、生産現場において徹底的な『政治掛帥』の大衆運動を組織し・発動すること、そこから始まる。社会主義社会の労働組合は、先頭にたつてそれを組織し・発動して、はじめて共産主義的『多面手』の教育・訓練・養成の任務を十全にはたしうるのである。

ところが、1958年のいわゆる『大躍進』の過程であらわれてくる『多面手』・『万能手』（この言葉が直接もちいられたのは主として人民公社の工農業労働結合に対してであるが、工業部門においても、労働内容の多様化として先述したことはこれにあたる）は、直接的には労働組合の組織的な強力な指導を介してあらわれてくるのではなく、むしろ労働組合にコミットされていない先進的な労働者の自発的な運動の中からでてくるのである。『多面手』についてだけではなく、その他の共産主義的要素の出現についても、同様のことがいえる。もちろん、先進的労働者というばあい、かれらの多くは、党員であり・労働組合の積極的活動分子でもあろうけれども、それにしても私の目をとおしえた文献からは、労働組合という組織が先頭にたち、その組織の一員として指導性を発揮したという印象はうけにくい。逆に、私には、1967年訪中の際、山東省済南の大規模なトラック製造工場において、何人かの労働者に対し、プロレタリア文化大革命以前の労働組合の役割や機能について質問したところ、『労働組合は、単なる福利厚生機関にすぎなかった』とはきすてるようにいった言葉が印象にのこっている。

とすれば、端的にいうと語弊があるかもしれないが、中国の労働組合は、解放以来、レーニンがいったように『新式に教育』されることなく、レーニンが期待したような任務を全面的・積極的に遂行していく体質——真の社会主義的労働組合の性質をもっていなかったのではないか。このことは、いわゆる『走資当権派』の主流は全国の労働組合組織を掌握していたといわれることと符合している。

生産現場における労働者の大衆運動の発動にもっとも緊密さをもつ労働組合がそのようなものであったとすれば、『奪権』斗争は、最初からどのような既存の組織をもあてにすることができず、逆に、それを打倒すべき対象として、『造反』のかたちで決起せざるをえないであろう。ここに、『奪権』斗争の本質と形態について、その歴史的な不可避性・正当性をみることができる。

『奪権』の意義——生産現場に『政治掛帥』の大衆運動を発動する権力＝プロレタリア独裁の基層権力を現場労働者の手に奪回した意義は、まさにそれによって、社会主義労働の生命力がよみがえったことにある。その権力を掌握して、社会主義労働は、新たな前進をはじめめる。

それでは、つぎに、プロレタリア文化大革命の中で社会主義労働がどう発展したかをみてみよう。

- ① 柯慶施、『工業戦線における大衆運動について』・『輝かしい十年』所収・北京外文出版・200頁。
- ② 1958年12月の段階では、人民公社の平均規模は、5000戸の農家・1万人の労働力・6万華畝の土地といわれ、この『第一に大であること』が、『政社合一』・『多角経営』・『全人民所有制の要素の出現』という『第二に公であること』の前提をなしていた。したがって、その後に提起されてくる人民公社の規模の縮少は、当然、『公であること』＝社会主義的特質を制約してくる。このことについては、拙稿、『人民公社生産隊の会計制度改革運動』・『中国研究月報』242号を参照されたい。
- ③ I. レーニン、『共産生産における左翼小児病』・邦訳大月版全集第31巻32～33頁

Ⅲ 革命委員会の成立と社会主義労働の新しい発展段階

『奪権』斗争の成功によって、社会主義労働は、その生命力をよみがえらせ

た。しかし、奪還された権力は、単に1958年の『三面紅旗』の段階の情況に復旧せしめられたのではなく、周知のとおり、新しい権力機構である革命委員会に組織された。このことによって、社会主義労働は、共産主義への前進において新しい発展段階にはいったといえることができる。

それでは、新しい権力機構である革命委員会とは、どのような性格のものか詳論は別の機会にして、以下の行論に必要なかぎりでごく要約的にのべておく。

直接に『奪権』斗争がはじまったのは、プロレタリア文化大革命の大衆発動（1966年5月16日、中共中央の『通知』）以来六カ月の激烈な斗争を経て、1967年1月、まず上海においてである。この上海の『一月のあらし』が、毛沢東によって激励され、ときをうつさず全国へ波及していった。上海では、あるいはそれにきびすを接して『奪権』した山東省や黒龍江省では、奪取した権力を革命的高揚の中で革命的大衆がどのように運用するかという問題が提起された。労働者階級を主力軍とする革命的大衆は、1871年のパリ・コミューンを想起しながら^①、中国の具体的条件とむすびつけてつぎつぎと従来の歴史にその前例をみない新しい事物をうみだしていった。

まず第一に、それは、革命的大衆・革命的幹部・解放軍の三結合という組織原則をもつ。主体は、いうまでもなく『奪権』の主力軍であった革命的労働者を軸とする革命的大衆であり、それにこれまでの革命の伝統と経験と指導をひきついだ革命的幹部が結合し、さらにその革命権力を鉄砲で擁護するために解放軍（のちにのべる末端単位の革命委員会では、民兵代表）がくわわる。いずれもが不可欠の構成要素とされ、例外はなく、量的には革命的大衆の代表が圧倒的に多いが、質的には三者にわけへだてはない。

第二に、革命委員会は、すべての権力を一手に掌握し、完全に一元的な指導をおこなう。当時、革命委員会（省革命委員会から最末端単位の革命委員会）までは、政権・財権・党権・文革権を掌握するといわれた。つまり、一般的な意味での政治・行政権力、経済および財政上の権力、従来党が掌握していた権力（党の代行）、そしてプロレタリア文化大革命の指導権・つまり革命時期の非常大権、これらを一身に集中する。なかんずく注目されるのは、党権の掌握

である^⑧。従来社会主義権力＝プロレタリア独裁権力の行使は、いわゆる人民委員会とそれを指導する党委員会の二本建の系列があり、それがゆるがしがたい原則だと考えられていた。それを完全に一元化してしまったのである。『指導の一元化』といわれる内容は、この政権と党権の一本化を軸として、経済をふくめ、文化教育をふくめ、革命の指導にいたる全分野の権力を単一の指導系統に集中することを意味している。このことにも、例外はない。

第三に、革命委員会は、それが成立するまでにかかわらず『大批判・大連合』の過程をとった^⑨。すなわち、なんのために『奪権』したのか；『走資当権派』がプロレタリア独裁を変質させようとしたからである。とすれば、奪取した権力は、そのプロレタリア独裁権力を変質させようとした敵に対し、それを徹底的に打倒しつくす方向と姿勢で組織されなければならない。その敵はどこにいるのか；『走資当権派』がそれであるが、同時に革命派といわれる人びとの頭の中にのこっている無意識のブルジョア的要素こそ、むしろその最大のものである。したがって、『斗私批修』の『大批判』、つまり、自分自身の中にある私心（ブルジョア的要素ののこりかす）と斗い・階級的自覚を深化させただけ、『走資当権派』の修正主義を批判する資格ができ・徹底的にそれをやることができる；このような批判をあらゆる部門でくりひろげ・とことんまではりきり（『大批判』）、その過程で革命的な人びとの心が連合してゆき・また同時に労働者階級のゆるぎない指導権がうちたてられてゆく（『大連合』）；そしてこの『大連合』が革命委員会に結晶するのである。通常、『大連合』とは、革命各派の連合と理解されているが、その質的内容は、まさに上述の意味をもっている。『大批判・大連合』の具体的な形式・形態はさまざまあるが、革命委員会は、かならずこの過程をとおして組織されるのである。

最後に第四に、革命委員会の委員は、単純な選挙によって任命されるのではなく、徹底的な大衆討議の反覆の中から選出される。この革命委員会の委員選出の大衆討議が、それ自体前記の意味での『大批判・大連合』の過程でもある。同時に、このようにして選出された委員は、けっして自分のもとの職務・生産の現場を離脱しない。そのことによって、しっかりと直接大衆と結合して

いる。常務委員のばあいは、期間を定めて『下放』されるわけである。

このような革命委員会が、省・市・自治区の単位から、県・地区の単位をとおして、末端のすべての工場・人民公社・機関・学校等の単位にうちたてられたのである。

プロレタリア独裁の機構として、革命委員会は、かつて歴史にその類例をみない新しい事物である。それは、第一にみずからが直接武裁している点において、第二に指導の一元化という点において、第三に思想革命化の大衆運動と直結している点において、そして第四に『役人にもなれば民衆にもなる』という点において^④、従来のプロレタリア独裁を新しい段階にたかめ、社会主義社会のあらゆる共産主義的要素の新しい発展をうながした。

それでは、社会主義労働では、それが具体的にどのようにあらわれたか。

まず、労働規律の側面からのべる。

社会主義労働規律は、一人ひとりの労働者の階級的自覚からうまれる。一人ひとりの労働者の階級的自覚は、まず労働者の生産実践や階級斗争の中から感性的につかみとられ、それがしだいに理性的認識へとたかまってゆく。階級的自覚が一つの労働規律に昇華するのは、その理性的認識の段階においてである。一人ひとりの労働者の思想において、歴史における労働者階級の役割・社会主義をおしすすめて共産主義へ移行するために労働者は生産現場でなにをなすべきか、その科学的な認識がふかまり・そのみちすじが明確になればなるほど、より高次の労働規律が確立され、『法定の基準作業量なしの、報酬をあてにしない』労働が、労働者自身のうちからでてくる欲求として組織されてゆく。革命委員会は、労働者の階級的自覚を感性的段階から理性的段階へたかめるのに、決定的な役割をはたした。革命委員会は、その成立の過程から今日の段階にいたるまで、プロレタリア文化大革命をおしすすめる基本的な・決定的な手段として、広汎な・徹底的な・くりかえしくりかえしの『大批判』を展開している。その内容は多様であるが、すべての事例に共通していえることは、一人ひとりの労働者が、その過程で歴史の法則をつかみ・みずからの階級斗争の経験を理論化し・生産現場の問題と世界革命の問題を理論的に結合し・自分

が権力を掌握しているのだという自信をふかめてゆく。活動的な分子だけがそうなのではなく、まさに七億の人民の一人ひとりがそうなりつつある。これはむしろ、1967年秋、いくつもの『大批判』を実際に参観する機会があった私の実感である。

エンゲルスは、つぎのようにいったことがある。すなわち、『社会によって生産手段が没収され……計画的意識的な組織があらわれると、……かくしてはじめて人間は、ある意味において、動物界から決定的に区別され、動物的生存条件を脱して人間的なそれにはいる。今日まで人間を支配してきた人間生活条件の外圍は、いまや人間の支配と統制のもとに服し、人間はここにはじめて真の意識的な自然の主人公になる。……かくてはじめて人間は、十分な意識をもって自己の歴史をつくりうる。……それは、必然の王国から自由の王国への人類の飛躍である』^⑤。

『自由の王国』の実現は、なお激烈な斗争と迂余曲折のみちをたどるかなり将来のことではあるが、生産手段の公有制という客観的条件の成熟と同時に、『人間が十分な意識をもって自己の歴史をつくりうる』主体的な条件は、労働者の一人ひとりの主観的能動性が感性的段階から理性的段階へ発展し、主観的・感性的な意欲がそのまま歴史の客観的法則に合致するようになるにつれて、それだけ成熟する。革命委員会は、そこに集中された新しい型のプロレタリア独裁権力を挺子として・つまり圧倒的な『大批判』の展開によって、この主体的条件を意識的に・積極的に・もっとも広汎に成熟させてゆくてだてをひきだしたのである。

『奪権』以後、革命委員会のもとでの社会主義労働の規律は、まさにこのような階級的自覚にもとづいている。この発展をもっとも明確に表現しているのは、プロレタリア文化大革命の過程でゆるぎなく確立された『抓革命促生産』のスローガンである。従来の『政治掛帥』は、いわば、方針であり・路線であったが『抓革命促生産』は、その内容を理論化し・体系化し、社会主義社会における法則として完成させた^⑥。すなわち、『政治の観点からことをおこし、政治の観点から成果を評価しよう』という出発の方針は、今日でははっきりと

『革命を徹底的におしすすめることが、生産発展の最大の保障である』という結論をだしたのである。『革命と生産、精神と物質、上部構造と経済的土台、生産関係と生産力の関係に正しい解答をあたえた』^⑦このような思想が、いま社会主義労働を律する意識として生産現場に聳立している。

それでは、つぎに労働の組織と内容について一言ふれる。

先述のところで、1958年の『大躍進』の過程であらわれた新しい社会主義労働の組織と内容の事例として、たとえば『比・学・趕・帮・超運動』や『両参制』をあげた。いま『奪権』以降の社会主義労働の組織と内容の特質を、それらとの比較においてみよう。

『両参制』における幹部の労働参加・労働者の管理参加は、相互に他方の性格を規定する。つまり、管理幹部の労働参加が単なるデモンストレーションでなく恒常的なものであるとすれば、基本的には、それは、労働者がどの程度・どのような形態で管理を掌握し、それによって管理幹部を解放するかにかかっている。同時にまた『比・学・趕・帮・超運動』においても、単純に労働者の意識構造だけが競争から相互援助へ方向をかえるのではなく、それを基軸としながらも、労働者の管理参加による労働の複雑化・幹部の労働参加に対する労働者の指導性の発揮といった要因の増大につれて、その分だけ競争から相互援助の形態へ具体的に移行してゆくのである。したがって、これらは相互に密接にあい関連しており、そのプロモーターは、労働者が権力を掌握し主観的能動性を発動して・どれだけ・どのように管理にくいこむか、という点にかかっている。

ところで、従来の現場労働者の管理へのくいこみは、『小組管理』という形態で現場管理に一応限定されている。もちろん、周知のとおり、『職工代表大会』・『生産管理委員会』等のトップへの代表参加制は定着していたが、それらは、大衆が参加するのではなく・大衆運動が直接もちこめる形態ではなく、そしてそのことのゆえに、現実の問題としてたとえばソ連における官僚主義・労働貴族発生の温床がしばしばここにあったように、しばしば硬直化・形骸化していたのである。

革命委員会という新しい権力機構は、その限界を打破し、現にしつつあり、なお今後、さらに一層大きくこれを打破する方向に発展してゆくとみられる。前述の革命委員会の性格の簡単な説明だけからでもうかがわれるように、それは、生産の現場に限定されることなく、企業の全体を掌握し、さらに各企業単位から直接延長して・直結のかたちで、地域の・そして県から省・市の全権力へとつながっており、そのどの段階へも、直接的に大衆が参加しており、あるいはむしろ、直接的にいきいきとした大衆運動によってその権力がささえられている。

このところに、革命委員会がプロレタリア独裁権力の新しい機構といわれるゆえんがあると同時に、重要なことは、このことが、労働者の管理参加を単に生産現場にとどめることなく、それを基礎として大きく進前させるみちをきりひらいたのである。

この可能性をどのように実現したかをもっとも明確に表現したのが、『精兵簡政』のスローガンである。それは、『抓革命促生産』とともに、プロレタリア文化大革命勝利の現段階における中心任務として、いたるところで強調されている。

『精兵簡政』の内容は、かなりひろく・ふかく理解され、たとえば、教育革命におけるカリキュラム再編成についてもこれがいわれているが、主題との関連に限定していえば、管理幹部の人員の減少・管理機構の簡素化を意味している。しかし、管理幹部を従来の二分の一あるいはそれ以上にへらすという典型例がしめしているように、やはり単純な能率の問題ではなく、体制の根本にかかわっている。すなわち、革命委員会という新しい権力機構をとおして、労働者が本質的には大衆運動の形態をとおして、直接的にその企業全体・さらにはその地方全体の管理を生産を離脱することなく掌握する；その分だけ『精兵簡政』できるわけである^⑧。

このような『精兵簡政』は、具体的には、かならず管理幹部の現場への『下放』と密着しておこなわれる。というのは、労働者が大衆的・直接的に・生産を離脱しないで・大衆運動の形態をもって現場管理以上の広汎な管理を掌握す

るのである。労働者が、大挙して管理事務所へおしかけるのではない。管理幹部が現場へ管理業務をたずさえてあらわれ、そこで業務を処理しなければならない。

したがって、このような形態においては、一方では、幹部の『下放』は従来のように一般的な体験として生産労働に参加するというのではなく、具体的に管理業務を執行するために現場の大衆運動に・あるいは生産活動にはいりこむということになり、他方では、それによって、現場の生産労働は、大衆運動をとおして、ますます直接的に単なる現場管理でない高次の管理業務と融合し、手足をうごかす肉体労働と国家・革命を論ずる哲学がわけへだてのないものになってゆき、その中でより高次の階級的自覚が醸成され、社会主義労働の新しい組織と内容がうみだされてゆくのである。

このような社会主義労働の新しい組織と内容は、いまさまさまなかたちで生まれつつあり、発展しつつある。それは、革命委員会という新しい権力機構と照応するところの社会主義労働の新しい発展段階ということができる。その具体的な紹介と分析については、稿をあらためてこれをおこないたい。

- ① 『奪権』後の権力機構について、上海では、直接的にパリ・コミューン方式をめざしていたことは、最初、新しい権力機構が『上海人民公社』と名づけられたことから明瞭である。この『人民公社—コミューン』という方式は、毛沢東の直接の指導によって、黒龍江省および山東省の事例にまなび、革命委員会方式にあらためられることになったが、基本的にコミューンの精神がつかぬかれていることはうたがいない。

『コミューンは、本質的に労働者階級の政府であり、占有階級に対する生産階級の斗争の所産であり、労働の経済的解放が達成されうる・ついに発見された政治形態であった。』K. マルクス、『フランスの内乱』・邦訳大月版選集第11巻332頁。

『コミューンは、プロレタリア革命によって「ついに発見された」形態であって、この形態のもとで、労働の経済的解放がおこなわれうるものである。』I.レーニン、『国家と革命』・邦訳二巻選集版第8分冊77頁。

- ② 革命委員会それ自体が、そのまま党機能を代行し『党権』を掌握するのではない。革命委員会の内部で、党员グループが党機能をはたし、革命委員会の核となる。いかなるばあいでも、党の存在とその指導性の確立が否定されたことはない。ただ、従来

の平行な二元指導が廃止されて、核心としての党とそれを取りまく革命的大衆の同心円として、革命委員会が構成され、指導が一元化されたのである。

- ③ 革命委員会の成立過程と『大批判・大連合』，さらに『斗私批修』との関連については、拙稿『抓革命促生産の法則性』・『アジア経済旬報』718号所収において展開した。
- ④ 人民日報・紅旗・解放軍報社論『革命委員会好』・『紅旗』1968年第1期所収を参照されたい。
- ⑤ F.エンゲルス，『反デューリング論』・邦訳大月版選集第14巻477頁。
- ⑥ このことは，③の拙稿において詳論した。
- ⑦ 林彪，『中共九全大会政治報告』第4節を参照されたい。
- ⑧ たとえば，『項城県革命委員会精兵簡政的経験』・『中国科学院印刷廠堅決走精兵簡政的道路』・『紅旗』1968年第4期所収，を参照されたい。